

芥川龍之介『或阿呆の一生』研究

—— 史実との比較を中心に ——

兼 定 明 日 美

はじめに

『或阿呆の一生』は、芥川龍之介が自殺する一か月前に執筆した遺稿であり、二十歳から三十六歳までの間に主人公である「彼」に起った出来事を五十一の断章で綴ったものとなっている。序文で「どうかこの原稿の中に僕の阿呆さ加減を笑ってくれ給え」としていることや、作中でゲーテの「わが生活より」の例を出し、「彼はそのため手短に彼の「詩と真実を」を書いて見ることにした」（四十九剥製の白鳥と書いたことからも、「彼」とは芥川自身であり、この作品は芥川にとつての自叙伝的位置づけであることが分かる）。

しかし芥川はこの作品の題名を数回にわたって変更しており、その中で当初は副題として付けていた「自伝的エスキス」という表記を削除している。自身の「自伝的エスキス」として書いた小説から、その副題を抹消したのはなぜなのか。

本論ではまず芥川自身の自伝的な小説に対する考え方を明らかにし、次に『或阿呆の一生』の全五十一章で語られている出来事と芥

川の実際の年譜を照らし合わせ、実生活における史実関係について検証する。検証には芥川の残した書簡や身近な人物らによる伝記、現時点で発表されている年譜などを使用する。その上で『或阿呆の一生』において芥川の心境を暗示していると見られる描写等について、他作品からの比較も交えて分析する。比較対象として晩年頃に書かれた芥川の他の小説、中でも内容に類似性が見られるものを利用する。それらを踏まえて考察し、『或阿呆の一生』という「自伝的エスキス」として書かれていた小説の在り方を改めて論ずるものである。

一 芥川の自伝的小説の解釈

第一節 「私小説」と「自伝的小説」

芥川がこの小説を「自伝的エスキス」と副題をつけ書き出していた時期、日本における「自伝的小説」とはどのような立ち位置であったのだろうか。『或阿呆の一生』の執筆を始めた時期は定かではな

いが、少なくとも日本において「自伝的小説」と同じような意味合いで扱われていた「私小説」に関する議論が、大正後期に入ってから活発に行われていたことは注目すべきであろう。

「私小説」の始めは大正九年から十年頃、加藤武郎の「所謂『私小説』」という単語や、近松秋江の「私は小説」といった言葉から、自然発生的に生まれたものであるという。この言葉の誕生には文壇に発表される作品の多くが、筆者の経験を踏まえて書かれた実名小説風のものであったことが背景にある。実体験を交えた小説なら創作するのも安易であることが、「私小説」の流行を後押しした面もあるだろう。しかしそうであるがゆえに一編の小説としては造形にかけるなどと言った批判や否定的な意見も多く存在した。肯定的に傾いてきたのは大正十三年から十四年頃である。革命文学としてプロレタリア文学が、前衛的文学革命としてモダニズム文学がそれぞれ頭角を現し、また関東大震災後の不安から通俗小説が盛行した時代である。それらに対抗すべく、「私小説」は既成文壇作家たちによって見直され始め、次第に認められていくこととなる。

そんな中指針的な論文として、中村武羅夫の『本格小説と心境小説』(大正十三年)が登場した。中では、本格小説とは十九世紀ヨーロッパバリアリズム小説をその規範とするものであり、心境小説は「或人間なり、生活なり社会なり描かうとするより、そんなものは何うでも好い、ひたすら作者の心境を語らうとする」ものであると述べている。この時点では本格小説と「私小説」という構図のみが完成しており、「私小説」としての枠組みは依然として大きなもののままである。

これに反論したのが久米正雄の『私小説と心境小説』(大正十四年)

である。ここで「私小説」を「自伝的小説」がイコールに置かれ、「心境小説」を切り離したということがそのタイトルからも明らかであろう。久米はここで「作家が自分を最も直截にさらけ出した」私小説こそ散文芸術の「真の意味での根本であり、本道であり、真髓である」と主張している。

つまり「自伝的小説」及び「私小説」の形態がはっきりしてきたのは一九二五年、芥川の自殺するほんの二年前の話なのである。『或阿呆の一生』を芥川が執筆するにあたって、「私小説」というジャンルの地位確立までの流れは当然意識されていたであろう。

芥川が自殺を考えるようになったのは実行するかなり前からのことである。葛巻義敏氏は「面倒くさいから死にたくなつたといふやうなことは大正十四年暮れにも云つて」いたと証言している。大正十四年はまさに「私小説」の枠組みが完成した年である。この時に『或阿呆の一生』のもとになる作品に関する構想があつたかどうかは分からないが、こういつた「自伝的小説」を巡る流れが芥川の眼前で起こっていたことに関しては留意すべきであろう。

第二節 芥川の「私小説」見解

目前で行われていた「私小説」分類に対する論争を芥川は黙って見ていたわけではない。「私小説」が定義をもちだした大正十四年、芥川は『私小説小見—藤沢清造君に—』と言う評論を十月に雑誌『不同調』に発表している。これは久米正雄の発表した『私小説と心境小説』という「私小説論」に対する評論である。さして長くない評論であるが、芥川の持つ「私小説」に対する観念がしっかりと

表れている。少々長文になるが、これから「自伝的小説」としての『或阿呆の一生』を取り扱う上では避けられない部分であるので、以下に引用する。

これだけのことを述べた後、僕はまず久米正雄によつて主張され、近頃また宇野浩二君によつて多少の声援を与えられた「散文芸術の正道は『私』小説である」という議論を考えてみたいと思ひます。が、この議論を考えて見るには「私」小説とは何であるかを明らかにしなければなりません。本家本元の久米君によれば、「私」小説とは西洋人のイッヒ・ロマンと言うものではない。二人称でも三人称でも作家自身の実生活を描いた、しかも単なる自叙伝に了らぬ小説であると言うことであります。けれども自叙伝あるいは告白と自叙伝的あるいは告白的小説との差別も、やはり本質的には存在しません。(略)

すると「私」小説の「私」小説たる所以は自叙伝ではないことに存在するのではない、唯その「作家の実生活を描いた」と——すなわち逆に自叙伝であることに存在すると言わなければなりません。(略)叙事詩と抒情詩が本質的に異なつていないとすれば、「私」小説も本質的には「本格」小説と少しも異なつていない筈であります。従つて「私」小説の「私」小説たる所以は本質的には全然存在しない、もしどこかに存在するとすれば、それは「私」小説中のある事件は作家の実生活中にある事件と同一視することのできると言うある実際の事実の中に存在すると言わなければなりません。すなわち「私」小説は久米

君の定義の如何に関らず、こう言うものになる訣であります。

——「私」小説は嘘ではないという保証のついた小説である。

もう一度念のために繰り返せば、「私」小説の「私」小説たる所以は「嘘ではない」と言うことであります。これは何も僕一人の膨張による言葉ではありません。(傍点ママ)

読んでみると、芥川は「私小説」というものに対しての真実性、もとい実体験性を非常に重視していることが分かる。芥川にとつての「私小説」が「嘘ではない」ものを保証する小説である以上、自身が執筆するにあたつても当然そのことは前提になるであらう。

第三節 芥川の「私小説」分類

芥川は十年ほどの作家生活の中で多くの作品を残した。しかし、「私小説」と分類されるような小説を発表するようになったのは死のおよそ二年前の一九二五年頃からである。草稿のようなものは以前から存在しているが、基本的に発表されることはないままだった。晩年になると『羅生門』や『鼻』のような古典の逸話を題材にした小説は執筆されなくなり、自身の体験が下地になった『大導寺半輔の半生』や『点鬼簿』といった「私小説」的なものが増えていく。その内容は大まかに二種類に分けられる。

一つは芥川の幼少期の思い出や経験を下地に書かれているものの、実際の家族関係と異なる記述があるなど、その内容が真実と必ずしも一致したものではない作品である。『大導寺半輔の半生』や『保吉もの』などがあげられるだろう。執筆していた当時にこれが世間に

「私小説」として受け取られていたのかどうかは分からないが、記憶違いや勘違いといった言葉では片付けられない明確な史実との矛盾が存在する小説群である。

もう一つは、芥川の晩年、自身の執筆している時期そのものこのことを書いた作品である。『歯車』や『蜃気楼』などがそれに当たる。執筆時期と経験時期が非常に近い、あるいは同時であるが故か、史実的な内容と近く、これらの小説群から晩年の芥川の状態を考察した論文も多く見られる。

それでは『或阿呆の一生』はどちらのタイプに分類されるのか。自身の体験について出来るだけ嘘なく書いたという序文の言葉からすると『歯車』等に近いが、過去をさかのぼっているという点では『大導師半輔の半生』等に被る。

芥川はこの小説について『或旧友へ送る手記』で「唯僕に対する社会的条件、——僕の上に影を投じた封建時代のことだけは故意にその中にも書かなかつた。なぜ又故意に書かなかつたと言へば、我々人間は今日でも多少は封建時代の影の中にあるからである。」と書いている。封建時代とは幼少期からの家族との関係を指していると思われ、そういった意味では時代をさかのぼった『歯車』的小説群であると見ることが出来る。

こうして見ると、『或阿呆の一生』は芥川の書いた「私小説」的なものの中でも、どちらにも分類できない小説であるといえる。

二 『或阿呆の一生』研究—史実との比較—

ここでは『或阿呆の一生』と芥川の実生活を比較し、その年代や

順序がどうかあるかを検証した(資料①)。おおむね史実の順序に沿っているが、明らかに矛盾している箇所も発見された。「十九 人工の翼」から「三十四 色彩」にかけてである。その内容について以降で説明する。

まず「十九 人工の翼」は章中で「二十九歳の彼」とされている。しかし「二十 械」を見ると、「彼等夫妻は養父母と一つ家に住むことになった」、それは「ある新聞社に入社することになったためだった」となっている。大阪毎日新聞社の社員となり、一九一九年四月に鎌倉を引き上げたことに該当するが、この時の芥川は二十八歳である。つまり、「二十九歳の彼」の出来事が、二十八歳の時の芥川の出来事よりも前に配置されているのである。

「二十二 或画家」を見てみると、「或画家」である小穴隆一と出会うきっかけとなった「二羽の雄鶏の墨絵」について書かれている。これは一九一九年に俳句雑誌『海紅』の表紙になったものであり、この年の十一月二十三日に小穴は芥川家を訪れている。つまりこれも「十九 人工の翼」よりも前の出来事なのだ。

「二十一 狂人の娘」を見てみると、章中の「動物的本能ばかり強い彼女にある憎悪を感じていた」とある。「狂人の娘」は多くの先行研究で「秀しげ子」であると言われており、これが「二十九歳の時に秀夫人と罪を犯したこと」以降のことであると考えられる。芥川二十九歳の一九二〇年頃の出来事であるだろう。「二十四 出産」は同年四月十日に長男が誕生したことを指していると思われる。

「二十五 ストリンドベリイ」「二十六 古代」は、「薄汚い支那人」「麻雀戯」「彩色の剥げた仏たちや天人や馬や蓮の花」などから、一九二一年三月から海外視察員として中国に派遣されていた時期の

事であろう。また「狂人の娘の手を脱した」という記述からは、中国に行くことで秀しげ子との関係を断ち切ろうとしていた様子が見られる。

「二十七 スバルタ式訓練」では「月の光の中にいるよう」な女性である野々口豊子が登場している。さらに描写として「春の山」があることから、少なくとも中国から帰国して次の年以降の春の出来事であると見られる。「二十八 殺人」でも「道の両側に熟した麦は香ばしい匂を放っていた」とあり、同じく春の出来事と予測される。一九二二年五月十一日から芥川は長崎に滞在しており、同月二十日にミサに列するために大浦天主堂に行っている。章中の「羅馬カトリック教の伽藍」がこれを指している可能性は高い。

「三十 雨」では「月の光の中にいるよう」な女性と「一しよに日を暮らすのも七年になつてゐる」とされている。この女性が野々口豊子であるとする「十八 月」の内容から考えて一九二三年から一九二六年のいずれかに該当するわけだが、順番に即して考えるなら一九二三年であるとするのが妥当である。しかしそうすると「十八 月」の内容は一九一六年の出来事であったということになり、「十一 夜明け」から「十三 先生の死」の頃の出来事と言うことになる。そうすると「十八 月」も順番を大きく前後させる矛盾点になりうるが、確実な資料がない以上この点に関して断定することは難しい。

「三十一 大地震」は一九二三年九月一日の関東大震災を指している。また「彼の姉の夫は偽証罪を犯したために施行猶予中の体だった」は、前年末に義兄西川豊が偽証教唆により失権、市ヶ谷刑務所に収監された事件のことであるため、この時期に間違いはないだ

ろう。「三十二 喧嘩」では、「縁先の庭には百日紅が一本(略)雨を持った空の下に赤光りに花を盛り上げていた」とある。百日紅の開花の季節は七月半ばから十月半ばであり、この年と翌年どちらの可能性もあるが、「異母弟と取り組み合いの喧嘩」をしたことを考えると、異母弟の家が焼け出されたこの年であろう。

「三十三 英雄」には詩が書かれている。芥川が詩作に興味を持ち、多く作るようになったのは三十三歳の頃、一九二四年前後である事から、この頃の前後と見る事が出来る。

そして「三十四 色彩」である。これは章中に「三十歳の彼」と言う表記がある。「三十一 大地震」の時点で芥川は三十二歳であるため既におかしいが、さらに三十歳の彼までさかのぼると「二十五 ストリンドベリイ」の頃と重なることになる。章番が十近くずれるのは大きすぎる矛盾であろう。

『或阿呆の一生』における史実との目立つ相違は以上のとおりであり、「十九 人工の翼」と「三十四 色彩」によるところが大きい。その二ヶ所さえなければ史実的な面だけを見た場合は問題ないともいえる。そう考えると、『或阿呆の一生』は比較的小説としての体裁は保っているが、しかしだからといってそのまま受け入れていいわけではない。詳しい考察は後述するとして、次の章では『或阿呆の一生』と同時期に書かれた遺稿作品の比較検討を行い、描写について詳しく見ていく。

三 『或阿呆の一生』研究―作品との比較―

最初に論述したように、芥川は『或阿呆の一生』以外にも「私小

説」的な要素を含む作品を発表している。この章では、『或阿呆の一生』と遺稿である『歯車』『闇中間答』を比較する。両作品と『或阿呆の一生』の執筆時期が同時期である可能性が高く、またどの作品にも共通して『阿呆』という言葉が存在し、それが全て「僕」または「彼」、つまり芥川自身を指している。「阿呆」について語られたこの二作品から、『或阿呆の一生』における創作性を検証する。

第一節 『或阿呆の一生』における描写表現

まず作品同士の比較をする前の事前資料として、『或阿呆の一生』全五十一章における描写的表現を抜き出して表にした(資料②)。これを見ると、一つの章の中に多くの色彩表現を盛り込んでいる事が分かり、中でも植物に関するものが目立つのがわかる。実在した植物として使われている部分もあるが、匂いの表現として使われるものもある。例えば「走っている小蒸汽の窓から向島の桜を眺めていた」(四 東京)のは現実風景だが、「薔薇の葉の匂のする懷疑主義を枕にしながら、アナトオル・フランスの本を読んでいた」(十六 枕)のは匂いの表現である。結果として植物の登場が他よりも多いわけだが、ここから芥川自身が植物に対して強いこだわりを抱いていたことが読み取れる。これを踏まえて他作品との比較においても、特に植物に関する描写については着目して検証した。

第二節 『闇中間答』

『或阿呆の一生』の「四十 問答」には、以下のように書かれて

いる。

何故お前は現代の社会制度を攻撃するか？

資本主義の生んだ悪を見ているから。

悪を？ おれはお前は善悪の差を認めていないと思っていた。ではお前の生活は？

——彼はこう天使と問答した。もつとも誰にも恥ずるところのないシルクハットをかぶった天使と。……

ここにおける問答の内容は『闇中間答』と類似している。特に最後に登場する「シルクハットをかぶった天使」は、『闇中間答』一章の最後の部分である「世界の夜明けにヤコブと力を争った天使」を指していると思われる。つまり、芥川のここで言う「問答」とは、『闇中間答』の事である可能性が高い。また、他にも両作品の関係を跨ぐ作品としてストリントベリーの『痴人の告白』がある。『闇中間答』では『痴人の懺悔』とされている。『痴人の告白』はストリントベリーが自身の結婚生活を描いた告白小説であり、ここにもまた「私小説」の影が見えている。

「阿呆」としてのキーワードや「私小説」を思わせる作品名、さらには「問答」の内容を表わしているこの『闇中間答』と『或阿呆の一生』における影響関係は明らかと言えるだろう。

『闇中間答』は小説としても非常に短いこと、「或声」と「僕」の対話形式であり風景を描写する場がほとんど存在しないことから、草木などの登場は少なかった。しかし「僕」、つまり芥川龍之介の言葉として草木についての価値観が語られているため、重要な資料とい

える。

僕 僕はまだ僕に感激を与える樹木や水を持っている。それから和漢東西の本を三百冊以上持っている。

ここでは、「僕」、つまり芥川にとつて樹木や水は感激を与えるもの、芥川自身にとつて肯定的な要素として働いている事が分かる。事実として同作中で、植物がそのような要素として取り扱われている部分を上げる。

僕 (二人になる。) 芥川龍之介！ 芥川龍之介、お前の根をしつかりとおろせ。お前は風に吹かれている葦だ。空模様はいつ何時変わるかも知れない。ただししっかり踏んばっている。それはお前自身のためだ。(後略)

『闇中間答』での最後の「僕」の台詞である。ここで「僕」とは芥川龍之介自身であることを読者に明言するわけだが、その自分自身に対して「お前の根をしつかりとおろせ」と叱咤する。「風に吹かれている葦」という表現は自身のまわりで現実にかけている出来事が荒立っている事を示している。世の中の逆風に負けずに自分の信念を貫き続けるという己への励ましを、「根をしつかりと」おろすことと「風に吹かれている葦」という植物になぞらえて表現しているのである。

第三節 『歯車』

『歯車』は一九二七年四月七日に書きあげられた作品である。この作品の主人公は「僕」であるが、この「僕」もまた芥川龍之介自身の事を指している。

『歯車』には「僕」は友人に『点鬼簿』を自叙伝かと問われ肯定する場面がある。『点鬼簿』は一九二六年十月に『改造』に発表された芥川作品である。自身の母親が狂人であつたことを初めて告白した作品であり、これを「僕の自叙伝だ」と「僕」に言わせていることから「僕」が芥川自身を指していることが明らかである。

また、『闇中間答』のように『或阿呆の一生』と似たような箇所が多いことも特徴である。『或阿呆の一生』の「十九 人工の翼」と『歯車』「五 赤光」における「昔(古代)の希臘人」に関する内容などは一目瞭然だ。『歯車』ではイカルの事を描写するのみであるのに関わらず、『或阿呆の一生』ではイカルスを自身に重ね合わせているという差異はあるものの、同一のものを別作品での表現に使用している。両作品を読めばこれらの共通点には気付かされることとなるだろう。そういう意味でも『或阿呆の一生』と『歯車』の間に何かしらの因果関係、影響関係があつたのは明らかだ。

『歯車』は全六章においてかなりの数の動植物が登場する(資料③)。中でも『或阿呆の一生』と被っている描写について詳しく見ていく。

まず「犬」に関する描写である。芥川は犬嫌いでは有名であつたが、自分自身について書いているこれらの小説の中では犬も一つのモチーフとして使われているように見える。

『歯車』『六 飛行機』では「半面だけ黒い犬」が出て来る前からたびたび白黒で彩られたものが登場しており、「僕」はそれを「どうしても偶然であるとは考えられ」ず、恐怖を感じながら妻の実家へと急ぐ。しかしそこでもまた黒犬に出会い、「誰にもわからない疑問を解こうとあせ」る。ここで「犬」はまた自身のこれからの未来を脅かす前触れではないかという恐れの対象として扱われている。『或阿呆の一生』では「か細い黒犬」に吠えかかられるものの、「その大さえ愛していた」という状態である。両作品における「犬」への扱い方が大きく違うように見える一面であるが、詳しくは後述する。

また、両作品の描写として着目される点として「薔薇」があげられる。『或阿呆の一生』では「十六 枕」、「四十五 Divan」、「五十 俘」の三ヶ所で登場する。同じ「薔薇」であるものの、匂い、詩人の心の中のイメージ、伝聞としての存在などその使用の仕方は全く違う。『歯車』において「三 夜」と「四 まだ？」で登場する「薔薇」も実物ではない。しかし「薔薇」がどのようなモチーフであるかは前後の文章からも明らかである。「三 夜」で「避難」という意識をもった先で入ったカフェの壁が「薔薇」色であった事に「何か平和に近いものを感じ」、「四 まだ？」でアスファルトの上に散った紙屑が光の加減で「薔薇の花にそっくり」に見える事に「何ものかの好意を感じ」ている。全体を通して「僕」にとつての安息の場所としての登場を果たしているのである。

また、アナトオル・フランスの名前が両作品において「薔薇」のすぐ近くに登場している。アナトオル・フランスは皮肉的、懐疑的な作風の作家であったが、『或阿呆の一生』では「懷疑主義」から薔薇の匂いがしたという記述をし、『歯車』では「薔薇」の花について

思い出すことで「アナトオル・フランスの対話集」を買うことを決める。執筆時期にさほど差がないと考えられるこの二作品において、「薔薇」と「アナトオル・フランス」が近い位置に設置されていることは無関係ではないだろう。

以上が『或阿呆の一生』と『歯車』らを並べたときに見えてくる描写に対する表現比較である。特に植物について書きだしたという理由はあるものの、こうして見ると非常に共通点の多い作品であることが分かる。これらの事実を踏まえて次章では『或阿呆の一生』という「自伝的小説」に関しての考察を行う。

四 『或阿呆の一生』考察

これまで、第二章と第三章を通して『或阿呆の一生』を史実、晩年の作品とそれぞれ比較をしてきた。この章ではそれらの事から分かった事実をもとに、『或阿呆の一生』に関する考察を行う。

第一節 『或阿呆の一生』の成り立ち

この『或阿呆の一生』とは、芥川にとつてどういった作品であるのだろうか。『或阿呆の一生』から当初つけられていた「自伝的エスキス」という副題が取り除かれていることは既に様々な文献で論述されている通りだが、それと同じく書き直されているものとして章の順番がある(資料④)。前半部分は時々大きく番号が飛ぶものの修正されていない範囲も多いが、後半に入ると特に幾度となく加筆修正がなされているのが分かる。

またそもその問題としての章番間違いもある。『或阿呆の一生』は五十一の断章で構成されているが、元々の草稿の時点では「三十雨」「三十一 大地震」の二章が共に三十章として書かれている。実際に作品が発表されるにあたって編集者によって章番が修正され、「三十一 大地震」以降の番号も全て一つずつ後ろにずれたことにより、現在の形になっている。

これらの修正から『或阿呆の一生』という作品を改めて眺めると、少なくとも執筆するにあたってかなりの加筆修正を行っているのは確かだ。特に後半の章番のずれ方が主に後ろであるという部分からは、前に何らかの章を書き足したことが原因であろう。

とはいえ、前半部分にはおかしな部分が多い。第二章で「十九 人工の翼」と「三十四 色彩」が史実的に前後の順番を大きく無視していることは論述したとおりだが、これらの章番は一度も修正されていない。それに対して後半への修正具合は凄まじい。芥川が『或阿呆の一生』を書き上げたのは六月二十日であり、それまでに身の回りで起きた事柄で最後に確認できるのは、友人である宇野浩二の発狂である。少なくとも六月の頭には芥川はこのことを知っていたため、その時に『或阿呆の一生』完成のために必要な題材自体はすべて出そろっていたことになる。その自筆原稿における「四十九 浮」の章番が後ろにずれている。一度『或阿呆の一生』を書き上げた後に足りない部分がないかどうかを確認したのは間違いない。

また、『或阿呆の一生』は章の題名が同じになっている場所がある。「六 病」「四十一 病」と「四十四 死」「四十八 死」である。このうち「四十四 死」の方は元章番四十六から四十三へ、それか

ら編集により章番の繰り下げが行われている。このような番号の動きしている章番は他にない。このことから、「四十四 死」は元々別の流れの『或阿呆の一生』に使われていた原稿ではないかと考えることも可能である。現在の形になる前に別の形の『或阿呆の一生』の原稿が存在し、「四十四 死」は元々そちらの中での原稿であったという推察だ。だが何らかの理由でその流れは修正され、現在の形の『或阿呆の一生』が書き上げられる。そして最後に前の原稿等を見たときにこの章を一度加えなおすことを考え、順番を考慮して配置した。元々抜くつもりの方の原稿であったから「四十四 死」と「四十八 死」の題名かぶりは存在しなかったのではないか。

だが「六 病」と「四十一 病」については解決せず、また「三十」とされていた章が二つあったことに気が付かなかった理由もない。結局のところ推察できる部分もあるものの、依然として『或阿呆の一生』は修正の足りていない不完全形態のままということになる。

芥川は七月二十四日に自殺した。『或阿呆の一生』が書きあがってからほぼ一ヶ月後である。芥川が実際に死の直前まで書いていた遺稿は『続西方の人』であるが、この作品は少なくとも「自伝的小説」でも「私小説」でもないのは確かだ。死を直前にした芥川が最も残したかったものが『或阿呆の一生』であったならば、やはりこの時にもっと何らかの手を加えたであろう。『或阿呆の一生』はそういう意味でも完璧な「自伝的小説」にはなり得なかったといえる。

第二節 作中描写の創作

第三章で『或阿呆の一生』と『闇中間答』『齒車』の描写を比較した。特に『齒車』『或阿呆の一生』の接点が多かったことは前述したとおりである。これらの描写設定からも『或阿呆の一生』が「自伝的小説」と言えない理由がある。

まず『齒車』との描写比較で登場した「犬」に関する描写の例から考える。『或阿呆の一生』では「犬」に吠えかかられているものの、「その犬さへ愛」することが出来るほど「彼」には余裕がある。「十一 夜明け」は芥川が作品『鼻』を漱石に激賞され、文壇に華々しく登場した頃の章である。『或阿呆の一生』ではこれ以降「犬」は登場しない。この時に実際に「犬」が存在した可能性ももちろんある。

が、『或阿呆の一生』が必ずしも「自伝的小説」ではないかもしれないという疑念をもって眺めてみると、芥川にとっての人生が開けたその瞬間に「犬」が登場したことには別の意味があるだろう。『齒車』での取り扱いを見ると、「犬」らの表現は先の展開を暗示しているように受け取れる。芥川にとって漱石に作品を認められたその瞬間こそが、自身の人生の頂点だったのではないか。嫌いでも受け入れることのできる存在として使われているのではなく、今後の人生は悪化して行く一方であったということを示す要素として、「犬」を登場させたのではないだろうか。

「十九 人工の翼」において「人生は二十九歳の彼にはもう少しも明るくはなかった」としている。「十一 夜明け」の「二十五の年」の「彼」の四年後の姿である。作家活動を始めてからの四年間が、「彼」にとって決して良いものではなかったことを表わしているの

は明らかだ。そう考えると人生の頂点に「彼の真上に星が一つ輝いていた」夜明けをおき、「人生の歎びや悲しみは彼の目の下へ沈んでいた」とさらなる悪化を感じさせる部分で「人工の翼を太陽の光りに焼かれた」イカルスに自分自身を重ね合わせているというのも対比的であり暗示的である。夜、星の下で犬をも愛せるほどであった「彼」はやがて、太陽に向かって飛び立ち死んでゆくのである。

また、「薔薇」に関する描写についても示唆的な要素がある。『齒車』『或阿呆の一生』における「薔薇」と「アナトオル・フランス」の関係性を見るに、『或阿呆の一生』における「薔薇」もまた好意的要素ではないかと推察出来る。そう考えて「四十五 Divan」を見ると、「詩人ゲーテ」は彼にとって作家として素晴らしい存在であったであろうことが見える。そんなゲーテの『詩と真実と』からの影響で「彼」も自叙伝を執筆しようとしたが、「容易には出来」ず、その理由は「自尊心や懷疑主義や利害の打算の末に残っているため」である。「懷疑主義」は「薔薇」との関わりの深い「アナトオル・フランス」の作風でもある。「懷疑主義」から離れ、最終的にゲーテへと向かっていった「彼」の心情であるが、いざそれに倣おうとするとき再び「薔薇」によってそれが叶わなくなっている。

そして「五十 俘」において「薔薇」は発狂した「友だち」によって食されている。「彼」にとって希望的、好意的要素であった存在が発狂によって呑み込まれたこの描写は、発狂する事を生涯恐れていた芥川には大きな意味のある部分だろう。『或阿呆の一生』には「Mozart」、「ゴッダ」といった実際に発狂した人物らの実名が登場し、「彼」は彼らの生み出した作品に魅かれ、彼らのようになることを恐れていた。そして発狂した「友だち」もまた狂死した「ゴッダ

リイ」の作品を愛していた。「彼」が『或阿呆の一生』を書き上げる動力源の人物につながる要素であった「薔薇」を、最も恐れていた発狂によって失わせている。「薔薇」によって繋がっていた「彼」の創作への思いがここで終息する。

こうして見ると、『或阿呆の一生』は史実的にそぐわないというだけではなく、意図的に書き加えられた描写があるということが見えてくる。「犬」も「薔薇」も、史実ではなく創作的工夫である。読み込もうとすればするほど、『或阿呆の一生』は「自伝的小説」からは遠ざかっていくのである。

第三節 『或阿呆の一生』という小説

『或阿呆の一生』は最初『彼の夢——自伝的エスキス——』という題名で書き出された。この時点で芥川が小説の完成形をどのように見ていたのかは分からない。そもそも何故副題を「私小説」という言葉が主流であったあの時代に、「自伝的小説」にすらせず「自伝的エスキス」としたのであるうか。

エスキスには文学作品の草稿という意味もあるが、元々は美術用語で試作のための下絵やデッサンを表わす。芥川の文学は芸術至上主義と呼ばれる事もあり、歴史小説の体をとりながらも、その登場人物たちに人間心理の深層を浮き彫りにさせるのが本来の作風であった。対して『或阿呆の一生』はそれには当てはまらない、告白傾向の強い作品である。「自伝的エスキス」という副題は、芸術至上主義であった過去と、「私小説」的な作風に頼ることとなってしまう晩年の芥川自身を重ねた巧妙なものであったのかもしれない。「私小

説」的なものを執筆しようとしているその時であっても、あくまで芸術主義を貫き通したいという意志表示だったのかもしれない。

技巧を凝らそうとしていた要素として、意図的に加えたと見られる創作的描写は存在していた。晩年の遺作『菌車』の告白的内容と『或阿呆の一生』の内容の類似性、「闇中間答」との似通った要素など、作品同士の横のつながりが感じられる。「自伝的小説」としてだけ考えて『或阿呆の一生』を読み進めても特に引掛かりのない部分が、何らかの意図があったのではないかという懐疑的な視点で読み進めると、疑問点として浮かび上がってくる。「十一 夜明け」の時点で既にこういった事項を取り入れている所を見るに、完全なる「自伝的小説」を書くという意志は芥川にはおそらく存在しなかったのだろう。

だが、そういった描写の創作性はあるにしろ、あくまで史実に沿わせ続ける事は不可能ではなかったはずだ。芥川自身も、そのことにはそれなりに気を使って執筆していたであろうことは第二章からも推察できる。にもかかわらず、最終的に芥川は史実の矛盾を残したまま、『或阿呆の一生』の執筆を終わらせた。

『或阿呆の一生』が史実的に「自伝的エスキス」として成立しなくなるのは、明らかに章番のずれが発生してくる「十九 人工の翼」以降である。だがこの頃の『或阿呆の一生』の章番修正は少ない。加筆修正が激しくなるのは後半に入ってからである。真実を隠蔽しようとしたからか、出来るだけ残そうとしたからか、一度は別の内容だった『或阿呆の一生』の後半部分をかなり修正している可能性があることや、最終章まで書き上げた後にも手直しをしていることなど、念の入れようはそれまでとは全く違う。しかしながら、矛盾

を抱えたままとなっている前半を訂正することはしなかった。

結果として芥川は『或阿呆の一生』を「自伝的エスキス」として、『自叙伝』の体裁を矛盾なく保つたものとして完成させることを放棄したのである。後半部分をどれほどに修正しても、芥川自身の書きたかった『詩と真実と』や「自伝的エスキス」を完成させることは出来なかったであろう。「彼」は「彼の『詩と真実を』を書いてみることにした」が、全くその通りに完成させることが出来たわけではないのである。

おわりに

『或阿呆の一生』は当初『彼の夢——自伝的エスキス——』として執筆され、最終的に『或阿呆の一生』と改題された後でも、「彼の『詩と真実を』を書いてみることにした」とし、自叙伝を書くようにしたという文章を残した。しかし描写などを見ると『或阿呆の一生』には明らかに創作的要素が含まれている。『或阿呆の一生』が意図的な技巧をこらした「自伝的小説」としての体裁になることは、最初から芥川自身想定内であったのだろう。

しかし後半へと進むにつれて「自伝的小説」としての形態すら『或阿呆の一生』は保てなくなってしまう。幾度も原稿を書きなおした後はあるものの、芥川は思い描いていた「自伝的小説」への完成へ繋げることは終ぞ出来なかった。『或阿呆の一生』とは「自伝的小説」への敗北を喫した、『彼の夢』として完成させることのできなかった小説の最後の形なのである。

参考文献・資料一覧

一次資料

- 『芥川龍之介全集 六』（筑摩書房、一九八七・三）
『芥川龍之介全集 七』（筑摩書房、一九八九・七）

その他

菊池弘・久保田芳太郎・関口安義編『芥川龍之介辞典』（株式会社明治書店、一九八五・十二）

『文芸読本 芥川龍之介』（株式会社河出書房新社、一九六二・七）

『文芸読本 芥川龍之介』（株式会社河出書房新社、一九七五・十二）

小澤保博『パトグラフィ「或阿呆の一生」（芥川龍之介）』（琉球大学教育学部紀要）第七五集、琉球大学教育学部、二〇〇九・八）

海老井英次『詩』と『阿呆』と——芥川龍之介「或阿呆の一生」論

——『（語文研究）第二十七号、九州大学国語国文学会、一九六九）

海老井英次『敗北と超克——芥川龍之介の死の波紋』（「知っ得 近代文壇事件史」、株式会社学燈社、二〇〇七・七）

宮坂寛『或阿呆の一生』試論——改題と「西方の人」執筆との関わりを中心に——』（「信州白樺」四十七・四十八合併号、総合紙工印刷株式会社、一九八二・二）

日本国語大辞典（株式会社小学館、一九七五・五）

庄司達也・篠崎美生子『日本文学コレクション 芥川龍之介』（翰林書房、二〇〇四・五）

芥川文・中野妙子『追想 芥川龍之介』（株式会社筑摩書房、一九七五・二）

関口安義『或阿呆の一生』（国文学 解釈と鑑賞）第四十八巻四号、豊文社・半七印刷、一九八三・三）

三好行雄『齒車・或阿呆の一生・西方の人など——永遠に超えんとするもの——』（「明治大正文学研究」季刊第十四号、株式会社東京堂、一九五四・十）

小穴隆一『二つの絵——芥川龍之介の回想』（中央公論社、一九五六・二）

『日本近代文学辞典 第四巻』（第日本印刷株式会社、一九七七・十二）

資料①『或阿呆の一生』と芥川の実生活の比較年表

※章題が()の中に入っているものは時系列が確定したわけではないがそこ付近であると考えられるもの

※斜体兼二重下線が引かれているものは章番の変更がなかった部分(詳しくは後述)

※背景色が薄暗いものは順番通りなのかが非常に怪しい部分

※背景色が濃いものは順番が入れ替わっている部分、**太字**は順序がおかしいことが確定している箇所

※年齢は数え年表記

芥川の年齢	『或阿呆の一生』章数	内容等一致が見られる部分・考察
二十歳	<u>一 時代</u>	章中に「二十歳の彼」という表記あり。また章中の「ある本屋」とは丸善を指す。
二十一歳 ～ 二十三歳	<u>(二 母)</u>	1914 年の 3 月 10 日の書簡に「一週間ほど前に巢鴨の癲病院へ行った」という表記があり、この章に書かれている内容からここでの経験が下地になっていると見られる。しかし後の内容を考えるとこの位置にくるのは不自然か。また、章中に「彼の母も十年前には少しも彼等と変わらなかった」という記述がある。芥川の実母フクが死んだのは 1902 年 11 月 28 日であり、当時芥川は十一歳である。これから 10 年後とみると二十一歳の時の出来事ということになる。
	<u>(三 家)</u>	章中の「ある郊外の二階の部屋」とは、1910 年に芥川の家族が引っ越した家を指している。章中に「彼の伯母はもう彼の二十歳の時にも六十に近い年よりだった」とあるため、二十歳以降のどこかを指していると思われるが、芥川は二十歳の時に第一高等学校の寮に入っているため、少なくともその寮から再び自分の家に戻った以降のことと考えられる。よって二十一歳から次に芥川家が居を移す 1914 年(芥川二十三歳)の 10 月までの間の出来事であると推測される。
	(六 病)	章中に「絶え間ない潮風」「この遠い海の向こう」とあることから、どこかに出かけて滞在している間のことと思われる。1913 年(芥川二十二歳)8 月 6 日に静岡県阿部郡不二見村(現清水市)に出発し、新定院に 22 日まで滞在している。海水浴場に出かけていたとの記述も。また 1914 年(芥川二十三歳)7 月 20 日からおよそ一ヶ月間、千葉県一宮に滞在している。
	<u>七 画</u>	章中に「秋の日の暮れ」「二十三歳の彼」とあることから、二十三歳の秋の出来事と思われる。また章中に「ゴオグの画集を見ているうちに突然画と云う者を了解した」とある。1914 年 11 月 30 日に「此頃になつてほんとうにゴーホの絵が分かりかけたやうな気がする」と恒藤恭にあてて書簡を出しており、この時

		期と一致する。
	八 火花	章中にある「同人雑誌」が第3次『新思潮』を指している。第3次『新思潮』は1914年の2月から9月にかけて発行されていた。前後の順序を考えると、最終号の頃のことか。
	(九 死体)	「二 母」と同じく1914年3月10日の書簡に「医科の解剖を見に行った」とあるが、順序に従うと少々おかしいと思われる点である。章中にある「王朝時代に背景を求めたある短編」は『羅生門』と見られる。
二十四歳	(十 先生)	芥川が先生(=夏目漱石)の主催する木曜会に初めて出席したのは1915年の12月である。章中に「秋の日の光」とあることから、この年の秋「先生」に会う前に「先生」の作品を読んで憧れを抱いていた事を示しているか。
二十五歳	十一 夜明け	章中に「彼の二十五の年」という表記あり。また「先生に会った三月目」とあるため、1916年2月のことと思われる。この月、芥川は旧友らと第4次『新思潮』を創刊し、発表した作品『鼻』が、漱石の激励を受けていた。
	(十二 軍艦)	1916年12月、芥川は横須賀の海軍機関学校の属託教官となっている。章中の「明るい軍港の風景」など、この時のことを指していると思われる。
	十三 先生の死	夏目漱石はこの年の12月9日に死去している。
二十七歳	十四 結婚	1917年の2月2日、芥川は塚本文子と結婚している。
	十五 彼ら	同年3月29日に芥川は東京の実家から鎌倉に引っ越しており、章中の「彼等の家は東京から汽車でもたっぶり一時間かかるある海岸の町」がそれに該当する。
	(十七 蝶)	章中の「藻の匂いの満ちた風」という表記から、まだ鎌倉にいるころのことと思われる。
	(十八 月)	章中の「月の光の中にいるよう」な女性は海軍機関学校教官時代に知り合った野々口豊子のことであり、そこから推察すると1916年12月から1919年3月までの間か。「三十 雨」の内容から考えると1916年か。とすると、この章も若干前へともっていかねばならないことになる。
二十八歳	二十 械	章中の「彼等夫妻は養父母と一つ家に住むことになった」、「ある新聞社に入社することになったためだった」が、大阪毎日新聞社の社員となったため1919年3月に海軍機関学校を辞し、4月に鎌倉を引き上げたことに該当する。
	(二十二 或画家)	章題である「或画家」とは小穴隆一を指しており、章中で彼と

		知り合うきっかけになっている「一羽の雄鶏の墨絵」は1919年、俳句雑誌『海紅』の表紙になったものである。この年の11月23日に小穴は芥川家に来訪した。
二十九歳	<u>十九 人工の翼</u>	章中に「二十九歳の彼」という表記あり。
	<u>(二十一 狂人の娘)</u>	章題である「狂人の娘」とは秀しげ子を指しており、章中の「動物的本能ばかり強い彼女にある憎悪を感じていた」とある。この「動物的本能」が「二十九歳の時に秀夫人と罪を犯したこと」以降のことであると考えたとこの前後のどこかか。
	二十四 出産	1920年の4月10日、長男が誕生している。
三十歳	(二十五 ストリンドベリイ)	「薄汚い支那人」、「麻雀戯」など、中国での行動であることが推察される。1921年3月から海外視察員として中国に派遣されていた間のことか。
	(二十六 古代)	章中の「彩色の剥げた仏たちや天人や馬や蓮の花」を見ている場面は、前章と同じく中国に派遣されていたことを指していると思われる。また「狂人の娘の手を脱した」という記述は中国に行くことで秀しげ子との関係を断ち切ろうとしていたことを表していると指摘されている。
	<u>三十四 色彩</u>	章中に「三十歳の彼」という表記あり。作中の「七八年前の彼の情熱」は22歳から23歳頃のこととなる。
三十一歳	<u>(二十七 スパルタ式訓練)</u>	章中の「月の光の中にいるよう」な女性(＝野々口豊子、中国について行ったという確認はされていない)や「春の山」、から考えると、少なくとも中国から帰国した次の年以降の出来事か。
	<u>(二十八 殺人)</u>	章中の「道の両側に熟した麦は香ばしい匂を放っていた」とあるため、春の出来事と予測される。1922年5月11日から芥川は長崎に滞在しており、同月20日にミサに列するために大浦天主堂に行っている。章中の「羅馬カトリック教の伽藍」とはこれを指すか。
三十二歳	<u>(三十 雨)</u>	章中の「月の光の中にいるよう」な女性(＝野々口豊子)と「一しよに日を暮らすのも七年になっている」ことから、彼女との出会いが1916年であったと推定すると1923年であるこの年に該当する。
	<u>三十一 大地震</u>	作中に出てくる大地震は1923年9月1日の関東大震災を指している。また章中の「彼の姉の夫は偽証罪を犯したために施行猶予中の体だった」は、前年の末に義兄西川豊が偽証教唆による失権、市ヶ谷刑務所に収監された事件のことである。
	<u>(三十二 喧嘩)</u>	章中に「縁先の庭には百日紅が一本、――彼は未だに覚えていて。

		—雨を持った空の下に赤光りに花を盛り上げていた」とある。百日紅の開花の季節は7月半ばから10月半ばであり、この年と翌年両方の可能性があるが、「彼の異母弟と取り組み合いの喧嘩」をしたことを考えると、異母弟の家が焼け出されたこの年である可能性が高いか。
三十三歳	(三十三 英雄)	この頃から芥川は詩に興味を寄せるようになっており、作中に詩が登場していることから見るとこの前後の年か。
三十四歳	(三十六 倦怠)	1925年8月20日から、芥川は軽井沢に滞在している。この時、当時大学生であった堀辰雄と毎日のように交流している。章中の「ある大学生」と「創作欲」について語っていることや、実生活における芥川と堀の師弟関係を見ると、この「大学生」が堀辰雄である可能性は高いのではないと思われる。
	(三十七 越し人)	章中の「彼と才力の上にも格闘できる女」とは片山広子のことで多くの論文で記述されており、ここでいう様な印象を受けたのは1924年7月22日の軽井沢「つるや」旅館での滞在であると指摘されている。また、章中の「越し人」は1925年2月14日に与謝野晶子の礼状に同封して送り、『明星』に掲載することを依頼している(3月1日発行の『明星』に掲載された)。既に「越し人」執筆済みであることを考えるとこの年の可能性が高い。また「越し人」執筆以降も、片山広子(それに堀辰雄や堀の想い人総子)との交流は続いている。
三十五歳	(三十八 復讐)	章中の「7年前に絶縁した狂人の娘」から見ると、前の秀しげ子との出会いから考えてこの年の前後か。
	(四十一 病)	この頃から健康が悪化し、様々な病気の療養に1926年1月15日から2月19日まで湯川原中西旅館に滞在している。様々な病名が章中で語られていることから、この前後の出来事か。
	四十二 神々の笑い声	章中に「三十五歳の彼」という表記あり。また「春の日の当たった松林の中」とあることから、4月以降か。とすると、4月23日から5月下旬まで静養のために鶴沼海岸東屋にいた時の出来事かと思われる。また章中の「神々は不幸にも我々のように自殺出来ない」は『侏儒の言葉』に似たような記述がある。『侏儒の言葉』は1922年から1927年までの間に書かれている(遺稿含む)。
	<u>(四十三 夜)</u>	章中に「荒れ模様の海」「彼の妻と二度目の結婚」などあることから、7月初旬に静養のために再び鶴沼の東屋旅館に移っていた時の事か。

三十六歳	四十六 嘘	1927年1月6日、義兄西川豊が自殺。章中に出てくる「彼の姉の夫の自殺」がそれに該当する。
	(四十七 火あそび)	章中の「かがやかしい顔」をした彼女は平松麻素子であり、芥川は彼女と4月7日に自殺をする約束をするが未遂に終わる。「一しよに死ぬことを約束」しているので、それより前の出来事。
	(四十八 死)	章中の「彼は彼女とは死ななかった」から、自殺未遂以後のことであることが分かる。
	(五十 俘)	この章内で発狂している「彼の友人」は宇野浩二を指している。宇野浩二の発狂は5月30日である。また、「この友達の入院した後」とあるが、芥川は6月2日に斉藤茂吉に宇野浩二の診断をしてもらい、彼の紹介で王子脳病院に入院させた。

資料②『或阿呆の一生』描写表

章	植物	色を表わす、或いはそれに準ずるもの
一		日の暮、薄暗がり、本はおのずからもの愛い影の中に沈み始めた、傘のない電燈、火をともした
二	薄い苔(まだらにぼんやりと白い)	鼠色の着物、血色の好い医者、ある脳髓の上に微かに白いもの、卵の白身、黒光りのする、大きいダイナモ
三		
四	桜	
五	ゴムの樹、肉の熱い葉	赤い鉢
六	椰子、椰子の花	
七	木の枝のうねり	ゴオグの画集、情熱、土、土手
八		紫色の火花
九	腐敗した杏(の匂い)	皮の下に広がっているのは美しい黄色の脂肪だった
十	檜の樹	
十一	鈴掛	夜、薔薇色、か細い黒犬、星
十二	阿蘭陀ゼリ	薄暗かった、明るい軍港の風景
十三		空はまだ薄暗かった
十四		黄水仙の鉢
十五	芭蕉の葉	
十六	薔薇の葉の匂い	
十七	藻の匂い	蝶の翅(きらめいていた)
十八		昼にも月の光の中にいるようだった
十九		情熱、冷やかな理知、太陽
二十		黄色い紙
二十一		曇天、海
二十二	唐黍、丈の高い唐きび、荒々しい葉	一羽の雄鶏の墨絵、秋の日の暮れ、盛り土
二十三		銀色に澄んだ空、窓窓の電燈、薄明るい広場、月の光の中
二十四		白い手術着、鼠の子
二十五	柘榴の花	月明かりの中
二十六	蓮の花	彩色のはげた仏たちや天人や馬や蓮の花
二十七		こういう昼にも月の光の中にいるやう、春の山
二十八	麦	日の光、
二十九		

三十	浜木綿の花	月の光の中にいるよう
三十一	熟しきった杏の匂い	
三十二	さるすべり	雨を持った空の下、赤光りに花を盛り上げていた
三十三		氷河
三十四	苔	情熱、色彩
三十五		明暗
三十六	芒原、赤い穂	噴火山
三十七	木の幹	かがやかしい雪
三十八	木の芽	絵
三十九	焼林檎	冷え冷え
四十		
四十一		雪曇りに曇った午後
四十二	松林	春の日の当った
四十三		荒れ模様の海、沖の稲妻
四十四		真っ暗、暗の中
四十五	アラビアの薔薇	
四十六	梢から枯れて来る立木	日の暮れのように薄暗かった
四十七		かがやかしい、朝日の光の薄氷
四十八	椎の若葉	
四十九		剥製の白鳥、黄ばんだ羽根、日の暮
五十	薔薇の花	
五十一		薄暗い

資料③『歯車』描写表

章	植物など	色を表わす、或いはそれに準ずるもの
一	松、棗、林檎、松林	オイル・クロオス(白地に細い青の線を荒い格子に引いたもの)、トルコ石の指輪、毛皮のショール(鼠色)、歯車(半透明)、緑色の笠をかけた、背の高いスタンドの電燈、青いマロック皮の安楽椅子
二	蕾を持った沈丁花、公園の樹木(皆枝や葉を黒ませていた＝僕には不快よりも恐怖に近い者を運んできた)、ダンテの地獄の中にある樹木になった魂	凝灰岩を四角にくんだ窓は雪のある庭に向かっていた(蕾を持った沈丁花の下に都会の煤煙によごれていた)、白いタッパ、白い帽を被ったコックたち、青空の映った雪解けの道、金ボタンの制服、褐色の紙を張ったバラック、肖像画、漆塗りの札、リンゴやバナナを盛ったの、黄色い車(タクシイ、「この黄色いタクシイはなぜか僕に交通事故の面倒をかけるのを常としていた」)、演技の好い緑色の車、恐ろしい人生を隠した雑食のエナメル、芭蕉、緑色の服を着た自動車掛り、黄色い表紙をした「希臘神話」
三	薔薇(色)、マホガニー(まがい)、松林(の中にある僕の家)、(プウルを後ろに向うの)松林(へ歩いて行った)、	黄色い表紙をしていた「伝説」、「宗教」と云う札を掲げた書棚の前に足を休め、緑色の表紙をした一冊の本へ目を通した」、カフエの薔薇色の壁＝何か平和に近い者を感じ、ナポレオンの肖像画、びろうどの服、黄いろい膏藥、半透明の歯車、緑色のドレス(僕は何か救われたのを感じ)
四	(アスファルトの上に紙屑が転がっているのが)薔薇の花(にそっくり)、枯芝、松林(の中に焼いた何冊かのノオト・ブックや未完成の戯曲を思い出した)	ベエトオヴエンの肖像画(滑稽に感じる)、片目だけ真っ赤に血を流していた(結膜炎)、凝灰岩、池
五	林檎(いつしか黄ばんだ皮の上へ一角獣の姿を現していた)、(黄ばんだ)松林、枯芝	不気味にも赤い光(僕を照らす)、白い小型の看板(僕を不安にした)、黄色い書簡箋、赤いワン・ピイス(を着た女)、凝灰岩(の窓)、黄ばんだ松林、海、池
六	低い松、松林(家)、松(梢に何羽もの雀)⇒僕が近付くと「皆言い合わせたように一度に空中に逃げ上って行った」、松林(妻の家)、松の梢(飛行機を発見)、松林(妻の家から帰る)、芝の枯れた砂土手、高い松(別荘の多い小道)、松林	白張りの提灯(葬列にない)、金銀の造花の蓮、海、セピア色のインク(どのインクよりも僕を不快にする)、半面だけ黒い犬、ブラック・アンド・ホワイト(ウイスキー)、タイ(白と黒、ストリントベルグのもの)虹の色を帯びたガラスの鉢(底の周りに翼らしい模様)白いレグホン種の鶏、飛行機(翼を黄色に塗った、単葉の飛行機)⇒鶏や犬は驚いて逃げ、犬は吠えながら尾を巻いて縁の下に入ってしまった、海(灰色に曇っていた)、鴉(2～3羽ブランコ台の上)、こげ茶色の鳥打帽(自転車に乗った男＝姉の夫に似ている?)、半透明の歯車、銀色の羽を鱗の様にたたんだ翼(網膜の裏に映る)

※縦軸は最終的な章番、横軸は章番の動き(編集による繰り下げ前)

①②等は章の動いた順番

	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
33	①																	
34		①																
35		①	②															
36			①	②														
37	①			②	③													
38		①	②		③	④												
39			①	②			③											
40						①	②	③										
41							①	②	③									
42										①								
43											②			①				
44											①	②						
45											①	②	③					
46													①	②				
47												②	①		④			
48													③					
49													①	②		③		
50																①		②

資料④章番の変更表

※●の部分は塗りつぶしの筆跡が強く読み取れなかったもの

現在の章番	原稿用紙での章番
四 東京	三→四
六 病	六→九→六
八 火花	五→四→六→八
九 死体	四→六→九→●→九
十六 枕	十二→十六
十七 蝶	十五→十六→十七
十八 月	十七→十八
二十四 出産	二十三→二十四
二十五 ストリンドベリイ	二十四→二十五
二十六 古代	二十五→二十六
三十三 英雄	三十二→三十二
三十六 倦怠	三十四→三十五
三十七 越し人	三十五→三十六
三十八 復讐	三十三→三十六→三十七
三十九 鏡	三十四→三十五→三十七→三十八
四十 問答	三十五→三十六→三十九
四十一 病	三十八→三十九→四十
四十二 神々の笑い声	三十九→四十→四十一
四十四 死	四十六→四十三
四十五 Divan	四十三→四十四
四十六 嘘	四十三→四十四→四十五
四十七 火あそび	四十五→四十六
四十八 死	四十五→四十四→四十五→四十七
四十九 剥製の白鳥	四十五→四十六→四十八
五十 俘	四十七→四十九
五十一 敗北	四十八→五十